

一八八三年三月二十九日(木)

ドツキネーシヨル
南神村のカーリー殿にて

——アムリタ氏、トライローキヤ氏などブラフマ協会サマージの会員との対話

三昧境にて

ファルグンの黒分五日、木曜日、チヨイトロ月十六日。イギリス流にはキリスト暦一八八三年三月二十九日。昼食の後、バガワンシユリ至尊、聖ラーマクリシユナは少し休息をとっておられる。ドツキネーシヨル南神村のカーリー殿のあのお馴染みの部屋である。正面、西側はガンガーの流れ。晩春、チヨイトロ月のガンジス河である。二時頃潮が満ちてきた。信者たちの誰かが来ていた。そのなかにブラフマ協会のアムリタ氏と、声の美しいトライローキヤ氏も居た。この人がケーシヤブのブラフマ協会サマージで神を讚美する歌をうたう時、並み居る老若男女は心を奪われるのであつた。

ラカールは病気である。このことを聖ラーマクリシユナは信者たちに話しておられる。

聖ラーマクリシユナ「この通り、ラカールは病気だ。炭酸ソーダを飲ませればよくなるかなあ？ どうしたらいいだろう！ ラカールや、ジャガンナータブラサードのお下がりをお食べ」(訳註、ジャガンナータ

——クリシユナを祀ったプリーの寺院

この言葉を話しておられる間に、タクールは靈妙不思議な御気分になられた。大神ナーラーヤナがラカール少年の姿に化身して眼前に顕現されたのだ！一方は、女と金から縁を切った清浄無垢な魂の持ち主——少年信者ラカール、これに対するは、神の愛に絶え間なく酔っている聖ラーマクリシユナの慈愛したたる両の眼——母の愛はすぐに燃え上がるのである。タクールはその少年ラカールを母親の愛情をもつてご覧になり、ゴーヴィンダ、ゴーヴィンダと愛おしく発音された。聖クリシユナを見る養母ヤシヨダーのような態度である！信者一同は、この驚嘆に値する光景に接して、ただ、もう身じろぎもできずにいる！ゴーヴィンダの名を呼びつづけながら、信仰の権化、タクール、聖ラーマクリシユナは三昧に入られた——身体は絵像のように全く静止し、もろちう諸々の感覚は消失し、視線は鼻頭に固定されたまま！息をしているのかどうかさえ分からない。肉体だけが取り残されているようだ。真我アイトワの鳥は超越意識の天空に飛翔している！今しがた、母性の権化のように息子の身を案じておられたあの御方は、どこへ行ってしまったのか？この驚くべき変容は何という名の三昧だろうか？（訳註、ゴーヴィンダ——牛を護る者という意味で聖クリシユナの別名）

このとき、あかつち赫土色の僧衣ゲルマをまとった見馴れぬベンガル人がひとり入ってきて坐った。

赫土色の衣と出家——芝居や冗談にでも間違ったことをしてはいけない

行動の諸器官を抑制していても

心が感覚の対象に執着しているのは

自己をあざむく者であり

彼は偽善者とよばれる

——ギーター3・6——

大覚者パラムハンササマシヴァ様の三昧は次第に解けはじめた。半三昧で話をしておられる。自然にお口からことばが出る、というふうである。いま入ってきた人の赫土色の衣を眺めてこうおっしゃる。

聖ラーマクリシュナあかつち「ところで、この赫土色の僧衣ゲルマはどういうわけかね？ そんな衣を着ているだけではないのかい？ ハッハッハ。ある人が言ったよ——お経を破いて太鼓をたたく——はじめのうちには人知れず聖典に書かれてある聖歌をうたっていたが、いまは大太鼓をたたく方にまわった、つまり、自分の修行を大げさに言いふらすようになった、ということさ！（一同笑う）

離欲ヴァイラクシャには、三つ、四つの種類がある。社会生活が面倒臭くなって赫土の衣を着る——こんな離欲は長くは続かない。または、する仕事が多くなったので赫土色の衣を身にまとい、カーシーベナレスに行く。三ヶ月もすると家にこんな手紙を出す。『仕事が見つかって働いている。数日後に帰宅するから、みんな心配せずに待っているように——』それから、何不足なく暮らしているのに、世間のことには何の興味も関心もなくなってきた。ただひたすら神様を慕って泣く。こんな離欲が真正正銘の離欲だ。どんなことでも嘘はよくない。嘘の服装はよくない。心にもない服装をしている人は、やがて破滅

する。嘘を言ったり行なったりしていると、だんだん精神ココロが荒れてくる。白い衣服（在家者の服装）を着ている方がよほど無難だ。心は欲でいっぱい、時には道ならぬこともするくせに、外側には赫土色あかつちの聖衣——恐ろしいことだよ！」

〔ケーシヤブの邸へ行き、ナヴァ・プリンダーヴァンを見したこと〕

「誠実な人は、たとえ芝居のなかでも間違つたことを言つたりしたりしてはよくない。ケーシヤブ・センのところへ、ナヴァ（新しき）・プリンダーヴァン」といふ劇を見物に行つたことがある。何やら一人の人間が十字架を持つてきた。それから別の人が水を撒き始めてね、平和の水だとか言つて。もう一人は酔つぱらいの役らしくて、千鳥足で出てきた！」

ブラフマ会員「Kさんでした」

聖ラーマクリシュナ「神の信者たるものがこんな役をやっちゃいけないね。あんなことに長いあいだ心をつかつていたらろくなことはない。心は洗濯屋の店先にある服のようなもので、浸した染粉の色に染まる。間違つた真似を長いあいだしていれば、その間違いの色に染まるんだよ。」

それから、ニマイ・サンニヤーササといふ劇（チャイタニヤの出家を描いたもの）をケーシヤブの邸に見に行った。劇の最後にケーシヤブのごますり弟子が何人かできて、芝居を台無しにしてしまったよ。一人がケーシヤブを指して、『現代のチャイタニヤであられる御方よ！』なんて言うんだ。するとケーシヤブはわたしを指して笑いながら、『では、この御方は何であられるかね？』わたしはこう言つた。

「わたしは、あなたの召使いのそのまた下男だ。チリのなかのチリだ」ケーシヤブは人にほめられるのが好きだった」

〔ナレンドラたちは永遠の完成者——かれらの信仰は生まれつき〕

アマリタヤトライローキヤに向かつてタクールはおっしゃる——

「ナレンドラやラカールのような青年は、生まれながらの神の信者だ。かれらは永遠の完成者だ。普通の人は、一生懸命修行したり、祈ったりして、やっと僅かばかりの信仰をもつようになるのだが、かれらは生まれたときから神様が大好きなのだ。ちょうど、洞窟の中に自然に出来たシヴァの像のようなもの——人間の手で作った像ではなく。

永遠の完成者は、普通人とは別な生き方をする。すべての鳥がみんなくちばしが曲がっているわけじゃない。完成者は決してこの世の事物ことに執着しない——ブラフラダのように。

普通の人は、礼拝をしたり、決められた修行をしたりして神への信仰を養う。だが、世間にも執着していて、女と金に大いに魅力を感じている。ハエが花やサンデシユ(インドのお菓子)に止まったり、そうかと思うと、平気で糞の上にも止まったりするが、あんなようなものだ。

永遠の完成者は、ミツバチのように花にだけ止まって蜜を吸う。永遠の完成者は、神様の果汁ジュースだけ飲んで、世間の果汁には振り向きもしない。

決まり通りの礼拝修行をするのはかれらの信仰ではない。何遍称名すべし、何時間瞑想静坐すべし、

かくかくの方式で供養すべし、こういうのは儀礼的信仰というやつだ。ちょうど、田んぼの向こうに行くのに、曲りくねったあぜ道をぐるぐる廻って行くようなもの。向かいの村に行くのに、小舟で曲りくねった河を大廻りして行くようなもの。

赤熱ライガの信仰バクティや愛プ্রেマの信仰バクティをもって、神様が好きで好きでたまらなくなれば、もう杓子しやくこ定規なやり方は必要ない。稲刈りの後の田んぼを横切るようなもので、あぜ道を廻ることはない。行こうと思う方向へまっすぐ簡単に行けばいいのだ。

となり村に行くのに曲がりくねった河を漕いで行くことはない——田畑一面に水があふれた時はね！ まっすぐに舟を漕ぎさえすりゃいいんだよ。

この、真つ赤な熱い信仰——居ても立ってもおられんような——神に対する熱情と愛慕の気持ちが必要れば、神さまをつかむことはできない」

〔三昧ことよりの理——サヴィカルパとニルヴィカルパ〕
(訳註)

アムリタ「せんせい！ あなた様は三昧のときどんなふうにお感じになるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「聞いたことがあるだろう、黒蜂のことを思い詰めて考えていたアブラ虫が、その黒蜂になってしまった話を——。どういうことかわかるかい？ 深鍋のなかの魚がガンジス河に放されたような感じだ」

アムリタ「我アムは少しも残っていないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「ああ、普通の場合は少し残っている。金の粒を回転砥石でどんなにこすつても、ごく小さな粒がどうしても残っているものだ。それから、大きな火が燃えていて、その火花のひとつみたくいなものだ。外側の意識は全くなくなるが、あの御方はホンの少しだけ我^{アハ}を残しておいて下さる——楽しむためにだよ！ ヲワタシ^シと^タアンタ^タがあればこそ楽しむことができるんだよ。もつとも、時にはその我^{アハ}の痕までも、あの御方がすっかり拭き取ってしまうことがある。これを^シジャダ・サマーディ^イまたは^ニルヴィカルバ・サマーディ^イ（無分別三昧）^シというのだよ。このときのこととはどんな具合だったか、口で説明することはできないね。塩人形が海の深さを測りに行つたが、入つたらたちまち溶けてしまった。ミイラ取りがミイラになつた。こんな場合、いつたい誰が海から上がつてきて報告するのかね？——海はこんなに深かつたと！」

（訳註）三昧^{サマディ}は大きく分けて二種類ある。一つはサヴィカルバ・サマーディでバーヴァ・サマーディとも言う。信仰の道から入る三昧で、この場合は、楽しみを味わうための線のような我が残っている。もう一つは智識の道から入る三昧で、ニルヴィカルバ・サマーディ（無分別三昧）と^シ言う。「これではない、これではない（ネーテイ、ネーテイ）」と分別・判断による否定を極限までおしすすめていって、最後に自我が消えてなくなる、主・客を超えた最高の三昧である。この三昧に入ると、二十一日で肉体は減すると言われている。